四月の恋はダイヤモンド

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四月の恋はダイヤモンド

【Ｎコード】
Ｎ３８９７Ｓ

【作者名】
鹿の子

【あらすじ】
四月をテーマに書いた短編集です。
自サイトでも公開中。

ボーイ　ミーツ　ガール

こういう職業に就いているせいなのか、私は気恥ずかしいほどの『ボーイ　ミーツ　ガール』の瞬間を多々目にすることがある。

「はぁ。なんか、こっちまでどきどきしてくるなぁ」

国語科準備室に戻り、溜め息をつきながら教科書やら資料を自分の机に置く。

入学式から早一週間。

私の担任する一年C組の生徒たちも、どうにか中学校生活に慣れてきたようだ。

そして、その頃から、生徒たちの恋が始まる。

さっきも国語のプリント運びの手伝いを頼んだ村井君と真下さんの間に、なにやらこうほんわかとした空気が流れる瞬間を感じてしまったというか。

あぁ、そうか。そうなりますか、と思いつつも、やっぱりこっちまでどきどきしてしまったりもして。

中学生って、小学生の幼さからは脱しているけれど、かといって高校生に比べると一山超えていないところもあって、こっちからすると見ててほんとバレバレでありつつ本人たちはそれに気が付かない迂闊さもあって。

そんなところが、可愛いなぁと思ってしまう。

「波田（はた）先生、大丈夫ですか？」

誰もいないと思った部屋から人の声が聞こえて、そしてその声の人物が向こう側の席の机の下からのそりと出てきた。

「わ、わ、ななな、どうしましたかっ？」

机の下にいた同僚の山野先生が体中を埃だらけにして立ち上がっ

た。
「机の下に五百円玉が落ちてしまい、それを拾っていたんですよ」
机の下の奥の奥まで転がってしまいそれを取るのに時間がかかって、と言いながら山野先生は左手の親指と人差指にその五百円玉を挟んで私に見せてきた。
「それは、大変でしたね」
びっくりしたぁ、と思いながら私も五百円なら必死で拾うなぁと思ったり。
……ううん。一円でも拾うけど。

「体、悪いんですか？」
山野先生が頭の埃を払いながら聞いてくる。
「体？　悪くないですよ」
山野先生ってば、新学期早々縁起の悪いことを。
「でも、さっき。心臓がどうのとか」
そう言いながら山野先生は今度はシャツについた埃を払いだした。

「心臓？　あ、それは」
山野先生は、「どきどきしてくるなぁ」って私が言ったことを勘違いしちゃったのかも。
「違いますよ。心臓がどうのってことでどきどきしたわけではなくて。ほら、先生もご経験ないですか？　生徒たちが、こう……仲良くなる瞬間に居合わせちゃったことって」
あまりあからさまに「恋」なんて言葉を山野先生には使いたくなかったので、そう言って誤魔化した。
するとありがたいことに山野先生は私の表現にぴんときてくれたようで、「あ、はいはい。なるほど」と言うとにやりと笑った。
そこへ丁度同僚の田中先生も戻ってきたので、山野先生が机の下から取り出したその五百円で私たちに珈琲をおごってくれるということになった。

中庭にある自販の側に置かれた細長いプラスチック製のベンチに三人で座って、そこから丁度見える桜を見ながら珈琲を飲んだ。

「田中先生、波田先生ってば、生徒たちの『ボーイ　ミーツ　ガール』の瞬間を目にして喜んでいたんですよ」

山野先生が田中先生にそんなことを言う。

「え？　ボーイ……。あぁ、はいはい」

田中先生はそう言うと、静かに笑い目を細めた。

「きっと生徒たちは、自分たちの感情がそんなにも大人にばれているなんてことは、思いもしないんでしょうね」

田中先生がそう言うと、山野先生も「そうそう」と続けて「実際、生徒自身は隠したいって、隠せているって思っている感情が、こっちから見たらバレバレだってことはありますからね」と言った。

その山野先生の言葉に大きく頷きながら、「それ、すごくわかります。私もこの仕事を始めてから、自分の中学時代を振り返ることが多くて。すました顔をしながら感情を外に出さないように気をつけている生徒を見ると、自分が中学の時もあんな感じだったのかなぁなんて思って。青くなったり赤くなったりすることが多いですよ」と言った。

そして、「でも、まぁ、そのいろいろと恥ずかしいことがあったとしても、それを上回るキラキラした輝きとか煌きっていうもが子どもたちには溢れるほどあって。私にはそれが眩しくて、たまにその眩しさにじーんとくることさえありますよ」

こうして大人になった今、十二歳から十五歳までの生徒たちと過ごすことで、自分にとってもいかにあの頃が貴重な時間だったのかということを知ることができた。

「戻りたいとは思わないけれど、あの時期の大切さを今になって実感することはありますよね」と、田中先生が言う。

「ぼくは戻ってみたいなぁ。でもって、波田先生のような先生と禁断の恋に落ちる」
山野先生が笑いながらそんなことを言う。
「嫌ですよ。山野先生みたいな生徒。年中心配していないといけないじゃないですか」
私がそう言うと、「そこが狙いで」と山野先生が言う。
「うーん。もしやぼくはお邪魔虫では」
田中先生はそう言うと、珈琲を持ってベンチから立ち上がった。
「田中先生ってば」との私の言葉に先生は笑うと、「冗談ですよ。ちょっと業者さんに電話しないといけないんで」と言い、山野先生に「ごちそうさまでした」と頭を下げ校舎へと戻って行った。

「……私も、戻ります」
困った空気が流れてきたので、私も慌てて席を立つ。
「生徒同士の空気には敏感なのにねぇ、波田先生は」
からかうような顔をして、山野先生が私を見上げてくる。
「そ、それでいいんです。私は教師なんですから」

本当は気が付いている。
山野先生の気持ちに。
だから逃げようとしている。

私はまだ、山野先生とどうにかなりたくなかった。
山野先生と初めて会った三年前の四月から、私だって先生のことは気にはなっていたけれど。
でも気になる気持ちの反対で、まだいろいろとやりたいことも大事にしたいこともあって、恋だけに飛び込むことができないのだ……。

両方を上手く回せるほど、器用じゃない自分がわかっているから。

「気長にお待ちしていますよ」
山野先生はベンチに座ったまま、足をぐんと伸ばすとそう言ってきた。

遂に言葉によって意思表示されてしまった私は、正直うろたえてしまった。
うろたえながらも、ずるいんだけど嬉しい気持ちもあって。

すごく複雑。
私の今の心は玉虫色だ。

「おじいちゃんになってしまいますよ」
私がそう言うと、「ってことは波田先生もおばあちゃんってことで」なんて山野先生が言うから、私は笑ってしまった。

さっきまでの困った空気が一転して、穏やかなものに変わる。
この空気、落ち着ける。
体に馴染む。

ふいに風が吹く。

埃の無くなった山野先生の頭の上に、薄ピンク色の花びらが、はらりはらりと舞いながらゆっくりゆっくりと落ちていくのが見える。

その花びらの。
その姿は。

そう遠くない未来の、私の心の行く先と。
重なるといいなと、そう思った。

四月・朝・渋谷・マンション

徹夜仕事の後、ファミレスで朝ごはんを食べ自宅マンションに戻ってみたら、玄関の前にすらりと背の高い、髪を短い三つ編みにした制服姿の女の子が立っていた。

「ええと」
その娘さんの視線をしっかりと受けながらも、でももしかしてなんて思いながら自分の後ろをぱっと振り返る。

……誰もいない。
おまけに言うならば、この階にはこの部屋しかない。
うむむ。

「伊勢崎（いせざき）　雉（きじ）さんですよね」
コホッコホッと小さく咳をしながら、その娘さんが言う。

かわいそうに。
風邪らしい。
声も枯れて……って、突っ込みどころはソコじゃない！
伊勢崎　雉っていうのは、こっちの職業上の名前。
ペンネーム。

「ファンです」
げげげっ、というこっちの声とハモルように、その娘さんの「サインしてください」って掠れた言葉が重なった。

「しゅ、修学旅行？　高校の？」
へぇ、なんて言いながら緑茶を勧めその娘さんの話を聞く。
「はい。うちの学校は一年生のこの時期に東京への修学旅行があって。今日はクラスのみんなで渋谷に来たんです。みんなは、１０９とかディズニーストアに行っています」
「はぁ。左様ですかぁ」

しかし言わせて貰うなら、部屋の時計はまだ十時前をさしていて。
こんな早い時間から渋谷に来たところで、さっき言っていた場所だって開いていないだろうに。
「でもわたしは、伊勢崎　雉さんのファンなのでいろいろと調べてここに来ちゃいました」
その娘さんはそう言いうと、こっちの出した緑茶を優雅な仕草で飲んだ。
「はぁ。左様ですかぁ」

こんなところに来るよりも、ミッキーやミニーのグッズが売っている場所のほうがいいだろうに。
お茶を飲ませたら、駅まで送ったほうがいいのかもしれない。
いやでも、こんな大人と一緒に歩いていたら、職務質問受けちゃうとか？
うーん。でも送ったほうがいいよねぇ。うん。

まぁ、この娘さんみたいに、何か人と違うことをしてみたいって気持ちは分かるけれど。
分かるけれど。

ここは渋谷で東京で。

地方から来たと言う高校生の娘さんが、朝早くから来る様な場所ではない。
明るい顔とは違った顔もあるってことを、こちとら知らないわけじゃないから。
そして「伊勢崎　雉」が好きってことは、この娘さんにはどこか危ないとこもあると思うし。
ぶっちゃけ、「伊勢崎　雉」の書くものは、ＰＴＡスレスレの危ない内容だから。

こんな娘さんが読むものじゃないよなぁって思う。
自分が高校だった頃は、棚に上げて。

お茶を飲むとその娘さんは、かばんからガサガサと本を取り出した。
それは「伊勢崎　雉」のデビュー作で、今から五年前のものだ。
帯には「鮮烈デビュー。高校生作家　伊勢崎　雉　十七歳」とある。

十七から五年間。
出会った担当さんがよかったのと、書きたいことが山ほどあったおかげで、出す本出す本大当たりした。
でも、「伊勢崎　雉」の名前が全国区になったのは、それとはまた違ったところでだった。
初めての印税で買った宝くじが、どかんと当たってしまったのだ。

そのニュースが流れたとき周りの人からは、「おまえはもう一生分の運を使い果たした」なんて言われたものだ。
そんなありがたい言葉を頂きながらも、今日まで大きな怪我もなく、人生満喫させていただいていますが。
そのお金で、こうして住む場所も確保できたのだし。

渋谷の駅から歩ける場所に建つかなり昭和臭のするこのマンションは、そのお金で買ったものだった。

「ええと。名前も入れる？」

マジックを持ちながらサインを頼んできたその娘さんに聞く。

「はい。お願いします。ヒダカです」

「ええと。『日高』さん？」

指で宙に文字を書いて確認すると、「いえ。『日高』ではなくて」と娘さんはいきなり人の左手を掴むと、手のひらにマジックで「緋鷹」と書いた。

自分の手のひらに書かれた漢字を、まじまじと眺める。

「へぇ。珍しい名前」

文字が見易いように、くっと手の向きを変えた。

緋色の鷹だって。

「習字の時に困りそうな名前だね」

そう感想を言うと、緋鷹さんはにっこりと笑った。

乙女の微笑み。

その微笑にこたえるようにと、鷹の字がマジックで潰れぬよう気をつけながら丁寧にサインを書いた。

「ありがとうございました」

緋鷹さんはそう言うと、ようやく深呼吸をすることができた人みたいに大きく息をすった。

玄関まで、緋鷹さんを送る。

「ほんとに渋谷の駅まで送らなくていいの？　友だちとの待ち合わせ場所は決めている？」

そう聞くと、「はい。マクドナルドで待ち合わせしていますから」と緋鷹さん言い、そしてじっとこっちを見てきた。

「あの」

緋鷹さんが口を開く。
「こんな風に、私みたいなファンがよく来るのですか？」
緋鷹さんの声は心配そうだ。
「いえ。緋鷹さんが初めて」
だから仰天したのだ。
「あの、差し出がましいようですが」
緋鷹さんがまたまた何かを言い出す。
「伊勢崎さんはお金があるようですから、オートロックのマンションに住み替えたほうがいいと思います」
女子高校生の緋鷹さんが、なんと、うちの親がいつも言っている台詞を言い出した。
「こんな変なヤツもロックできるし」
そう言うと、緋鷹さんは、徐に編んでいた髪を解きだした。
肩につくかつかない程の長さの、真っ黒な髪がすとんと表れた。

「女の人の一人暮らしは、危ないですから」
そう言うと緋鷹さんの表情は、ぱっと大人びたものに変った。
「卒業したら、ボディガードのアルバイトをしてもいいですよ。ぼくが」

ぼくが。
……ぼくが。
ぼ、ぼくがぁ〜？

「お、男の子さんでしたか」
私が驚くと、女の子の制服がやけに似合う緋鷹少年は、策士な顔でにやりと笑った。

四月・学校・放課後・教室（前編）

修学旅行の行動班が一緒の天原（あまはら）　緋鷹（ひだか）を待っていたら、「兄の代打ってことで」と、奴の妹である天原　朱鷺（とき）がやって来た。

「ええと」

これは何かのジョークかと思い、自分の後ろを振り返ってみたり、視線をあちこちと動かして緋鷹を捜すと、「緋鷹は、来ないよ」と天原　朱鷺が言った。

「来ないって。……でも、服が」

そうなのだ。

天原　朱鷺はなんたることか、緋鷹のものと思われる男子の制服を着ていたのだ。

と、いうことはですよ。

「緋鷹は……」

「女装中」

げげっ、と言うこっちの声と、天原　朱鷺の「変態だよね」って言葉が重なった。

「じゃあ、まぁ。とにかく、行きますか」

ここは宿泊所の側なので、いつ先生達が来るか分かったもんじゃないから。

「あれ？　もう一人はまだ？」

もう一人とは、平松のことだろう。

うちの班は、班の最少構成人数である三人なのだ。

「あぁ、平松のことね。あいつね、腹痛。食べすぎだって」
今朝、バイキングスタイルの朝食の際に食い意地のはっている平松は、「東京の飯はやけにうまい」とかなんとか言って調子に乗って。
結果、トイレの住人２８号になったのだ。
「お気の毒に」
「まぁね。でも、食べていた時は、幸せだったんだろうからさ」
その後のことは、それのおまけとみなすしかないな。
「ところで、天原さん。あのさ、少し歩くんだけど、いいかな？」
「いいけど」
「よかった。最寄駅だともっと近いんだけど、こっちに少し歩くと、その駅とは違う路線の駅があってさ。そこから電車に乗ったほうが、その……あまり人にも会わないかなぁって」

昨日見た地図によると、その路線で乗っても渋谷には行けるようだったから。
同じ学校の奴等には、あまり会わないほうがいいと思えたし……。

とはいえ、渋谷に行ったら確実に会いそうだけどさ。

「あ、そうね。うん、いいよ」
そう答える天原　朱鷺の言葉を合図に、二人で歩き出した。

天原　朱鷺と緋鷹は、双子の兄妹だ。
こうして見ると、確かに似ているし、背の高さも同じくらいだ。
だからまぁ、多少大きめではあるにせよ、天原　朱鷺は制服をそれなりに着こなしていた。
そしてこの制服の本来の持ち主である緋鷹は、天原　朱鷺の制服を着用して、首都東京を闊歩中ってことだ。

緋鷹って、女装が趣味だったのかぁ。
それは、知らなかったなぁ。

「ねぇ。緋鷹のことを考えているの？」
天原　朱鷺が言う。
「そりゃ、そうだよ。友だちだし。本人の希望とはいえ女装で歩くなんて、やっぱり心配じゃん」

東京くんだりまで来て、女装。
いやいや。見方を変えると、むしろ地元じゃないから、思いっきり趣味に走れるってことなのだろうか。

「緋鷹ね、伊勢崎（いせざき）　雉（きじ）に会いに行ったのよ」
会えるかどうかは知らないけどさ、と天原　朱鷺は笑った。
「ほら。緋鷹の好きなホラーだかなんだかを書いている作家さんよ、伊勢崎　雉って。　あの人がね、何かのインタビューで『男の人が苦手』って答えていたのを読んで、会いに行くには男じゃ困るって。それで、私に制服を貸せ、なぁんて言ってきたのよ。緋鷹ってば」

伊勢崎　雉。
確かに緋鷹は、その作家さんの熱狂的ファンだ。
謎の女装も、伊勢崎　雉が理由なのだと知り、妙に納得できた。
そのことには、納得できたけど。

「その人が、男が苦手だとするのなら、女装しても無駄だと……」
所詮緋鷹は、男なんだから。
ひと目で、ばれるだろうし。
「確かに、女装しても無駄よね。そもそもが男なんだから。……私もそう思ったのよねぇ」だから一応は反対したのよ、と天原　朱鷺

は言った後、「でもまぁ、ばれなければ、結構いい線まではいけると思うし」サインを貰えるくらいはね、と言うとまた笑った。
「え。……。ばれるでしょ」

いくらなんでも、高校生の男子が女子には間違われないだろうし。

喉ひとつとっても、男女では違うし。

「ばれないと思う」
天原　朱鷺が言う。
「気色悪いと思いつつ、私もおもいっきり協力しちゃったし」
下手すると私よりも女の子っぽく変身したかも、と天原　朱鷺が言い出した。

「最初から女の子だと思えば、そう見えてくるレベルまで持っていったし」
「そう見えてくるレベルって、本当に？　だって、普段の緋鷹は全然女の子っぽくないけど」
「まぁね」

はなから緋鷹を「男」だと考えるから、女装が失敗するって思うってことなのかな。
最初から女の子だって受け止めて、天原　朱鷺ご推薦の奴の女子高生姿を見たら、そう見えるってことかいな。

緋鷹が女の子ねぇ。
つまりが、天原　朱鷺似ってことだよね。

「……あ、危ない。今一瞬危険な世界にトリップしそうになった」
天原　朱鷺の暗示にかかり緋鷹の女子高生姿を一瞬でも、「いけ

るかも」と思った自分が情けない。
「ふふ。本物見たら、もっと危ない世界に行っちゃうかもよ」
そう言いながら天原　朱鷺は、くすくすと笑い出した。

緋鷹とは仲がいいが、妹であり同級生でもある天原　朱鷺とは、実は話しをするのは今回が初めてだった。
クラスも同じになったことがないし、クラブでも選択授業でも一緒になったことはない。
そんな天原　朱鷺と、こうして緋鷹の代わりってことで一緒にいるわけだけど。
意外というか、なるほどというか、天原　朱鷺は話しやすかった。
緋鷹を共通にしての話題なんかもあったし、それにもしかしたら緋鷹よりもさばさばした感じだと思え、そこがいいなぁと思ったのだ。

そんなことを天原　朱鷺に言うと、「緋鷹は、女々しいからねぇ」という答えが返ってきた。
「緋鷹って、女々しいというか、一途というか。諦めが悪いって言うか」
「あぁ、わかる、それ！」
こっちの反応に天原　朱鷺は、「でしょ？　でしょ？」と返してきた。
「緋鷹の奴、学食のメロンパンが、業者が仕入先を変えて違うメーカーのになったら怒り出してさ。『こうなったら、昼休みにコンビニに買いに行くしかない』なんて言い出すから、平松と二人で押さえるのが大変でさ」

うちの学校の校則では、「よほどの理由」が無い限り一度学校に入ったら外に出てはいけないのだ。

そして残念ながら、メロンパンを買いに行くのは、「よほどの理由」には当たらない。

「緋鷹、メロンパンなんて食べるの？　ひゃあ、乙女だなぁ」
天原　朱鷺が言う。
「あれ。　知らんかった？」
兄の好み（しかも双子の）を知らないなんて、意外だった。
「知らない、知らない。私よりも緋鷹の周りにいる友だちのほうが、緋鷹のことをよく知っているんじゃないかなぁ」
「そんなもんかな」
「そんなもんよ。いないっけ。兄弟」
天原　朱鷺が訊いてくる。
「いるよ。小学生の妹が」
思い出すと顔がにやけてくる。
「もしかして、シスコン？」
「うん。そう」
そう答えると、天原　朱鷺は一瞬びっくりした顔になったあと、「素敵ね」と言いにっこりとした笑顔を向けてきた。

四月・学校・放課後・教室（後編）

それから、電車に乗った。

そして、計画通りに「たばこと塩の博物館」を見学して、まだ時間があったので「電力館」にも行った。

「中学生みたいな計画ね」

緋鷹との待ち合わせ場所だというマックに向かいながら、天原朱鷺がそう言う。

「……中学生みたい、か」

この計画を立てたのは平松だけど、行きたい場所として提案したのは……。

そういえば案を出した時に、今の天原　朱鷺と同じようなことを平松は言ったのだ。

俺たちは中学生か、と。

緋鷹が反対しなかっただけに（今思うと、緋鷹の頭の中は「たばこと塩の博物館」どころではなく、既に伊勢崎　雉で一杯だったのだろう。よって、反対なんてするわけなかったのだ）、平松の嫌そうな顔が印象的だった。

文句を言いつつも計画を立ててくれた平松だったけど、本心ではこの「中学生みたいな計画」通りの行動を取りたくなかったのかもしれない。

もしや、腹痛騒動も嘘では……。

そう思えてしまうほど、平松には頑固というか、自分の思うところを押していくようなところがあったのだ。

メロンパンを買うために学校を脱走しようとした緋鷹に対し、平松はそのメロンパンを再び売店で売るようにと動いたのだ。
どんな手を使ったのかは、不明だけれど（考えたくもないけれど）。

そんなことを考えるうちに、平松は緋鷹の入れ替りについても、知っていたのだろうと思った。
知っているからこそ、このややこしい状況が面倒になってずる休みをしたとか。
うわぁ。これ大当たりだぁ。

「百面相」
天原　朱鷺がこっちを見て言う。
そして、よしよしって言うとこっちの頭をなでだした。
「緋鷹が、虹野さんと仲がいいの、分かった気がする」
天原　朱鷺はそう言うと、今度は顔を覗き込んできた。
「緋鷹って無垢なものに弱いのよね。私みたいに強くてしたたかなのは苦手なの」
緋鷹の学生服の匂いにぱっと包まれる。

「緋鷹との入れ替りをＯＫしたのって、私が虹野さんと話したかったからっていうのも、あるんだ。緋鷹が『虹が、松が』って煩いから、一体どんな虹なんだか松なんだか見てやろうじゃないのって」
天原　朱鷺の言葉に驚く。
「虹は見たから、今度は松だなぁ」
天原　朱鷺が笑う。
「今度から私もその仲間に入れてね」
その天原　朱鷺のその言葉にかぶさるようにして、「すみません！　君達、ちょっと写真を撮ってもいいかなぁ」という知らない人

の声がした。

「……とんだ、修学旅行だった」

みんなよりも遅くに、修学旅行を終えて帰ってきた平松がそう言うなり、げんなりとした声を出した。

「「え？そう？」」

「緋鷹と虹、そこではもるなって」

眉間に皺を寄せながら平松が言う。

「だいたい、よくも俺様を一人東京に置いて帰りやがったなぁ」

ズル休みでもなく、食あたりでもなく、盲腸炎だった平松は、あのまま東京の病院に運ばれそのまま手術することになったのだ。

「仕方ないでしょ。誰かさんは入院したんだから」

平松の痛いところを突く。

渋い顔をした平松の横で、緋鷹はほけら～と魂の抜けたような顔で伊勢崎　雉のサイン本をいじってた。

緋鷹の話によると、天原　朱鷺の思うとおり女装はばれなかったらしい。

しかもなんと緋鷹は、自ら自分の正しい性を伊勢崎　雉に告げたらしい。

おまけに、なんだか仲良くもなった、とか。

サイン云々は形としてあるからそうなのだろうけど、仲良し云々は緋鷹の妄想って気もしないでもない。

「全く二人だけで、楽しみやがってさぁ」

悪玉全開の平松はそう言うと、一冊の雑誌を出した。
そしてページを開く。
「なんだよ、これは」
平松がどすの利いた声で言う。
盲腸がなくなった分、声が低くなったのか？

「どれどれ……」
見ると、なんと雑誌に、あの時に渋谷で天原　朱鷺と一緒に撮られた写真が載っていた。
「へぇ。ほんとだったんだねぇ」
半分冗談かと思ったけど。
そして更に驚くことに、写真で見た方が、天原　朱鷺はより緋鷹に近かった。
しかも。
「男らしいし」

よほど、緋鷹よりも男らしいような。
そしてふと緋鷹を見ると、さっきまでほけら～としていたのが嘘の様に、その写真を見たまま固まっていた。
そして、平松から雑誌を奪うと、なんとその雑誌の発行元やらの確認をしだした。

「あ、なんだよ。これ、まじかよ！」
そう言うなり緋鷹は、携帯を掴んで教室から飛び出して行った。
「……なんだ、あいつ」
平松も緋鷹の様子にびっくりしたようで、毒気の抜けたような顔になっている。
「あぁ、そうか」
緋鷹の残した伊勢崎　雉の本の発行元を見る。
「同じだ」

同じだって理由だけで、彼女がこの雑誌を手にするとは限らないけれど。
「誤解、されないといいけど」
ねぇ、と平松に相槌を求める。
「は？　誤解もなにも。これ、虹と緋鷹じゃ……」
「これ、緋鷹じゃなくて、妹の天原　朱鷺だよ」
すると平松は、「どういうこと？」って訊いてきた。

平松が知らなかったことを意外に思いながら、ことの顛末を話した。
すると平松は顔を青くして、「おまえらって。ほんと、何を考えているんだか。恐いよ」と言ったっきり黙ってしまった。

「まぁ、そんな顔しないでさ。みんな無事だったし」
何をそんなに心配するかなって思い言う。
平松がじろりとこっちを睨む。

「あのなぁ。何もかも、上手く転がったからいいものの。一歩間違えたら、とんでもないことになっていただろうがっ！」
そう言うと平松は、機関銃の様に入れ替りのこととか（それを黙認したこととか）、写真を撮れられることの危険性などをくどくどと説明しだした。

まぁ、いちいちもっともなので、平松の言葉に頷く。
「心配性だね、平松は」との私の言葉に、「誰に対してもって、わけじゃない」と平松が言った。
な……なんと！

「……平松。気持ちは、わかるけどさぁ」
そう言いながら天原　朱鷺の顔を思い出す。
なぜ、天原　朱鷺かっていうと、本来思うべき緋鷹の顔じゃ、あまりにも生々しいと思ったから。
平松が、緋鷹をねぇ。
あ、いけね。
緋鷹の顔を思い浮かべてしまった。
天原　朱鷺、天原　朱鷺。
脳の映像担当部門にそう指令を出す。

「まぁ、確かにさ、緋鷹の女装はさまになっていたけれど。あれは、伊勢原　雉の為のもので。あぁ、何を言っているんだか」
深呼吸をする。
そして少し平松に近づく。
「緋鷹は男の子だから。……だから、平松の気持ちはわかるけど、少し難しいかも」
小声でそう伝える。
平松が心底驚いた顔してこっちを見た。
そして、「一生言ってろ！」って言うと、平松まで教室から出て行ってしまった。

残されたのは、緋鷹の本と平松の雑誌。

「虹、帰ろう」
ふいに声がした。
教室の後ろから、天原　朱鷺が入ってきたのだ。
あれから天原　朱鷺とは仲良くなって、時間が会うときには四人で帰ったりしていた。
「あれ？　二人は？」

天原　朱鷺が訊いてきた。
天原　朱鷺を待つために、三人で教室に残っていたのに、天原朱鷺が来たらその二人がいないんだもんなぁ。
「うーん。なんと説明したらいいのか」
実際、なんて説明したらいいのかよくわからない。

「じゃ、まぁ、二人で帰ろうか」
天原　朱鷺がにっこりと笑う。
平松も、緋鷹でなく朱鷺にすれば問題解決するものを。
「帰ろうか」
立ち上がりながら、はい、プレゼント、と雑誌と本を天原　朱鷺に渡す。
「あら。ありがと」
天原　朱鷺が笑ってそれらを受け取る。

女同士って、いいもんだなぁなんて思いながら歩く。
特に最近。
緋鷹はまだしも、平松の言動についていけない。
奴の言うことなすこと、さっぱり理解できない。

今まで、何故か平松や緋鷹といった男友だちと行動をともにすることが多かったけど。

ビバ、女同士。

嬉しいって、楽しいって思った。
ちょっと、くすぐいったいなぁ、って。

四月・学校・放課後・教室（後編）（後書き）

整理を兼ねた人物紹介（物語の最後にも関わらず）

天原　緋鷹（男の子）→伊勢崎　雉（女　作家）のファン

天原　朱鷺（女の子）→緋鷹と双子

虹野（女の子）

平松（男の子）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3897s/

四月の恋はダイヤモンド

2011年4月28日12時41分発行